

氏 名	松 谷 之 義 まつ たに ゆき よし
学位の種類	医 学 博 士
学位記番号	論 医 博 第 838 号
学位授与の日付	昭 和 55 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	異所性胸腺の発生学的検索

論文調査委員 (主 査) 教 授 安 平 公 夫 教 授 花 岡 正 男 教 授 寺 松 孝

論 文 内 容 の 要 旨

重症筋無力症に対する胸腺摘出術は、1939年の Blalock の報告以来、積極的に実施されている。手術成績は諸家の報告からみても明らかなように、70～80%の症例に有効であると考えられている。我々の経験した34例の重症筋無力症の手術成績も、非胸腺腫例86.4%、胸腺腫例75%と、ほぼ満足しうる結果をえている。

手術成績をさらに向上させるため、縦隔内で胸腺の被膜外にある胸腺組織にも注意をはらった上、胸腺を可及的完全に取り除くように努力してきた。その結果、若干の手術成績の向上をみたものの、いまだ100%に近い成績をあげるには至っていない。この手術成績の限界には、最近、免疫学的な面からの考察がなされているが、形態学的にも再検討される必要があると思われる。Goldstein は重症筋無力症の手術成績は、異所性胸腺組織が存在するか否かによって左右されると述べており、この異所性胸腺組織の存在の可能性を検討することは、極めて重要である。そこで今回は発生学的に、人における異所性胸腺組織の検索を実施した。

本研究に使用した症例はすべて、京都大学先天異常解析センターに保管されていたものである。胎芽期の症例は200例で、すでに連続切片標本にされているものを、光頭を用いて甲状腺、胸腺、および上皮小体の位置的関係を詳細に観察した。胎芽期の症例は58例で、いずれも気管、食道を含む縦隔組織を一塊として摘出し、前額断あるいは矢状断にて、数10枚の標本を作成し、胎芽と同様の方法で観察した。

その結果は下記のごとくであった。

1. Horizon XXIII の Stage で、胸腺はほぼその Permanent Position に達すると考えられた。
2. 胎芽期では、18例に頸部異所性胸腺組織をみいだすことができた。さらに、16例の胸腺の下降障害例がみられた。
3. 胸腺上極部の高さを左右比較したところ、左側の方が高い症例の頻度が高かった。

発生学的に胸腺は上下皮小体とともに、第3咽頭嚢から発生し、次第に下降し前縦隔に達する。時に、頸部に孤立した胸腺組織を散見することがあることは知られている。この異所性胸腺の由来について、

Norris は、胸腺が下降する際に遺残したものであると述べており、一方、Van Dyke は上皮小体との関係から、第4咽頭嚢由来のものであるとしている。我々は異所性胸腺組織の存在部位を、甲状腺と関連をもたし検討したところ、甲状腺上極部と下極部に大別することができた。さらに、上皮小体との関連からも検索を加えた結果、頸部異所性胸腺には、第3咽頭嚢由来のものと、第4咽頭嚢由来のものがあると推察できた。臨床的に頸部異所性胸腺は左側に発見率が高い。これは我々が観察した頸部異所性胸腺が左15個、右8個と左に頻度が高かったこと、および胸腺の左上極部の下降が遅れることにより説明された。

今回の我々の成績を直接的に、重症筋無力症例にあてはめ手術成績を検討することは困難である。しかし、重症筋無力症の手術無効例のなかには、異所性胸腺組織が残されている可能性はあると考えられる。

論文審査の結果の要旨

重症筋無力症の手術成績に限界があるのは、異所性胸腺が存在するためではないかと考え、発生学的に異所性胸腺の検索を行った。

研究に使用した症例は、胎芽200例、胎児58例で、京都大学先天異常解析センターに保管されていたものである。いずれも連続切片として、光顕的に観察した。

胎児18例に異所性胸腺をみいだした。その存在部位は、甲状腺上極部と下極部にほぼ限定されており、うち4例は上あるいは下上皮小体と密着して存在していた。このことから、異所性胸腺には第3咽頭嚢由来のものと、第4咽頭嚢由来のものがあることを明らかにした。

臨床的に頸部異所性胸腺は左側に発見率が高い。これに対し、著者の観察した異所性胸腺は、左15個、右8個と左に頻度が高く、また、胸腺の左上極部の下降が遅れること。この両者が、以上の臨床所見を説明するものと思われる。

以上の研究は、重症筋無力症の手術成績についての検討に貴重な新しい資料を加えるものである。

よって本論文は、医学博士の学位論文として価値あるものと認める。